

- 小さなエンジンを軽い車体に載せ、軽やかなハンドル操作などを楽しむ。今、市場は小さいが「魅力的なクルマ」「楽しいクルマ」の具現車として国産スポーツカーの開発、販売競争が激しくなった。メーカーの技術力とイメージアップを図り、自社ユーザーを掘り起こすという、ユーザー戦略からである。

トヨタ86(2000cc)が今年2月にマイナーチェンジを受けた後、ホンダS660(15年3月・660cc)、スズキアルトターボRS(15年3月・660cc)、マツダロードスター(15年5月・1500cc)、ダイハツコペン/第3のモデル(15年6月発売予定・660cc)と小さなスポーツカー相次ぎ登場だ。「ライトウエイトスポーツカー」と呼ばれるジャンルの車だ。セダンやSUVとは違う「走り」そのものの魅力が、若者、女性やシルバー層などの幅広い世代にアピールしている。

- これらのスポーツカーは扱いディーラーの店で試乗ができるが、台数が限定的なクルマもあるので問い合わせの上、試乗を申し込んだ方がよい。試乗、必ずしも購入しなければならないということではないので、この際、「スポーツカー乗り比べ」としゃれてみるのもよい。心が豊かになること間違いない。

- 「第9回 JAFみんなのエコ川柳」大賞がこのほど決定した。□エコ意識の高まりを反映して、過去最高の21,220句が全国から寄せられた(前年度比約5割増し)。

『我が家にも ノーベル賞の このあかり(山本洋子さん・岐阜県)』

昨年、ノーベル物理学賞を日本人3人が受賞したことで話題となった青色発光ダイオード(LED)をテーマにした川柳が大賞を受賞した。また、「ゴミ箱へ 今なに捨てたと 妻が問う(北村升治さん・三重県)」「エコという 今の時代に ケチは死語(長屋秀子さん・岐阜県)」という作品なども受賞した。

- クルマの販売は登録台数という実績を上げなければならないが、スポーツ競技はもっと勝敗の実績、成績に厳しいものがある。

プロ野球は6月に入りセ・パ交流戦が華やかだ。筆者はセ・リーグでは若い頃からの阪神ファンだ。その阪神の成績が今不振だ。

最近の週刊誌に『『人を育てた』中畑DeNA、それに比べて阪神タイガース』という記事が掲載された(週刊現代6月6日号)。小見出しには「横浜DeNAの快進撃がとまらない。優勝候補だった阪神の低迷も終わる気配がない。選手の平均年俵が球界一低いDeNAが、なぜ勝ち続けられるのか。両軍指揮官のチーム作りに、答えがあった」という名(?)分析があった。

両チームの対照的な姿について、評論家の江本氏は「DeNAがいいのはずばり、中畑監督につきる。とにかく覚悟をきめている」という。自前で選手を育て、選手もそれに呼応するように自覚を持って成長してきたDeNA。一方、阪神和田監督はチームに出来上がった『保身』の体質があるという。コーチ陣が選手にも、監督にも何も意見を言わない姿勢、それが馴れ合いにつながっているというのだ。

トップがリスクを負えるか、それとも保身に走るかで、組織は全く別物になるという。「強化、育成、補強と長期的なビジョンを持った人が出てこない、阪神は、同じことが繰り返されますね」と江本氏。汗を流し、リスクを乗り越えて育まれた強固な組織力は、金では買えない。年俵最下位チームの快進撃がそのことを教えてくれていると記事は結ぶ。

つまり、企業で言うと、リーダーの資質であり、社風・風土そして、社員を育てる教育方針だ。野球界に限らず、自動車販売業界もリーダーと人材(社員)の育成如何が会社の勝敗、命運を分ける。